

大に雑踏を極む。亦一壯觀なり。

豊平館 大通り四丁目にあり。西洋料理店にして、建築頗る壯觀なり、

明治十四年、天皇陛下、北海道御巡幸のとき、行在所に充つるがために

建築したるものにして、庭園甚だ廣大且つ清趣あるを以て、食後の散策

に一興を添ふるに足れり。館は、二百餘坪の二層樓、洋風にして食堂、

球突場、大廣間、寢室等の設備充分なり。外國人の旅宿を以て兼業とす。

旅宿と割烹店 北七條借樂園内にある東京庵、大通り三丁目なる東壽

司、南四條西三丁目なる開進樓、薄野遊廓内なる大中、大通り西三丁目

なる東海樓及び桃李亭等のごときは割烹店の主なるものなり。旅館は、

道廳前の山形屋、旭館、北七條の京華樓、南一條の北京樓等は、著名

なるものとす。

石狩町 札幌より小樽へ至る鐵道停車場なる琴似、輕川より至ること

を得て、汽車の便を藉ること多ければ旅客はこれに依るもの多しといへ

ども、稍迂回するを免れず。よりて此に附記す。さて石狩町は、往昔の

所謂石狩濱にして石狩川の河口にあり。其の港は東西四町、南北十町、

深さ一尋より五尋に至る。此の地開闢最も古く、寛文の頃、能登の漁民

松前より移住したるに始まれり。市街は、天鹽街道の要衝に當り、厚田

濱益兩郡の漁場を控む、物貨集散の中心として繁盛なる一區なり。

常山溪 札幌の西南にして豊平川に沿ひて上ること六里二十二町、其

の川の上流溪間にあり、開拓使の初、行脚僧常山なるもの、探検し、此

に温泉あることを發見し、浴場を設け、衆庶を入浴せしめ、以てこれが

病苦を救ふ。官、其の功勞を嘉し、特に道路を開通し、以て通行に便せ

しむ、道路坦々、車馬を通ずべし。爾後浴舎の設備成り、夏期入浴に來

るもの甚だ多し。温泉は、少量の硫黃化素を含み、華氏八十七度の温度

を有し、疝氣、脚氣病、腸胃病、婦人諸病、癩麻質斯病に効驗ありと云

ふ。此の地は、前に札幌岳の高峰を望み、後に稻武岳、天狗岳等の諸嶺

を負ひ、一條の溪流其の中間を串流し、水質清澄、山姿幽雅、實に一仙境と云ふべし。

●琴似停車場

札幌停車場を距ること二哩四鎖。

●輕川停車場

琴似停車場を距ること四哩七十二鎖。

●錢函停車場

輕川停車場を距ること四哩八鎖。

●朝里停車場

錢函停車場を距ること五哩七十五鎖。

神居古丹（石狩の神居古潭にあらず）朝里停車場を距ること凡そ一里の海岸にして、鐵道線路に沿へり。懸崖絶壁、高く天を摩して聳え、怒濤の翻倒し來らんとするが如く、從來を壓し、其の下は、直ちに海に

して磯を洗ひ、岩礁矗立して路殆ど絶えんとするがごとし。旅客の此の所を通ずる、實に一呼吸の間といへども、肌に粟するに至る。曾て鐵路布設のとき、米國土木技師「クロフラル」氏の規畫經營によりて、始めて完成したるものにして當時の狀、此處を過ぎるものをして、其の苦心を想察せしむ。西蝦夷日記に曰く、「カモイコタン」と云ふ崖あり、高さ二十七文、掌を立てたるがごとく、崩岩にして上には磯馴れし老樹一面に生ひたり。崖は、時々崩れ落つる故、土人等爰にて木幣を造り、神に手向して、無事を祈りて行くに、大割岩の簇々たるを渉り、又勿ね越えて潜り行く云々と。

●小樽停車場

小樽市街 西海岸第一の要港にして、高島岬の南、小樽灣に臨める一海區なり。東西七町、南北一里五町、丘陵を負ひて山に跨り、海濱に迫り、市街逶迤として西北より東南に延ぶ。人口殆ど六萬に近く、函館に

次げる大港にして特別輸出港たり。街衢の最も繁盛なるは、入船町、湊町、相生町、色内町等にして、回漕店、旅館、割烹店、海産物及び雜貨販賣店等、相櫛比し、頗る殷賑を極む、郡役所、商業會議所、海産物取引所、學校、病院、郵便電信局、銀行、會社、工場、新聞社等あり、越中屋、木どう、大原館、角中等のごときは、旅館の最たるものなり、此の地はもと、松前家の家臣、氏家某の支配の下に屬し、漁家數十戸、砂濱に點在するに過ぎざりしが、開拓使の設置以來、札幌市街の發達に伴ひ、内地との間に往復する船舶多く、石狩平野の開墾となり、次で明治十三年、炭礦鐵道の開通以來、頓に物貨集散の燒點となり、市街は俄に膨脹し、以て今日の盛大を見るに至れるなり。鐵路は手宮へ一哩七十八鎖朝里へ三哩二鎖あり。

龍徳寺 新富町にあり、曹洞宗にして高龍寺の末派なり。僧雲海の開基にして安政六年の創立に係る。

本願寺別院 開運町にあり、安政五年、新地町に創建し、明治七年、現今の地に移す。境内は八百五十餘坪あり。

量徳寺 入船町にあり、安政六年の創立にして境内七百七十坪あり。

高嶋岬 小樽灣の突角なり。岬頭に燈臺の設あり。前には小樽灣を控へ、後は漫々たる大海にして、東北は遙に天鹽の雄冬岬と相對し、以て増毛の暑寒別一帶の山脉を望見し、天氣晴朗の日は、海上遙に天賣、焼尻さては禮文、利尻の遠きを望むことを得べく、風景佳なり。

●手宮停車場

手宮 は小樽を距ること一哩七十八鎖、起點たる室蘭より百三十三哩三鎖とす。

余市 は余市川の兩岸に跨り、余市灣に臨める一小市街なり。東西六町、南北二十町、人口二萬に近く、警察署、郵便電信局あり。灣内水深くして大船巨舶を容るゝに便なり。且つ其の附近の海産物は、悉く集

中するを以て、市街甚だ繁盛なり。尙ほ前途大に有望の地に屬す。
然別 鑛山 小樽及び手宮の西方數里にあり。地は後志の國余市郡仁
木村に屬す。有名なる銀鑛にして同鑛より採掘する所の鑛石及び支山の
鑛石をも製煉しつゝありて、規模宏大なりと云ふ。

手宮石碑 小樽埠頭數百間の西方、懸崖の上、百尺ばかりの所、石を
鑿りて發見せしものなり。其の石文は、今博物館内に保存すといへども
其の何たるを詳にせず、或ひは云ふ、『クルーニツク』古代の文字な
りと。或ひは云ふ、支那古代の文字なりと。又云ふ、石器時代の事を記
したるものなりと、又云ふ、古代豪族の徽章なり、石器時代の墓標なりと、
諸説紛々として未だ其の歸着するところを究むること能はざるなり。土
人の言ふ所に依れば、小人の器具なりと。小人は矮身の人にして侏儒の
謂なり、古人にあらず。或ひは云ふ、『アイヌ』以前、此の地に『イスキ
モー』人種の住したるにあらずやと。然れども此の説非なり。今檜山郡

小砂村は、其の昔時小人の居れる故に名づく。然れば小人は矮人侏儒
の謂にあらずるなり云々とは、北海道誌の言ふ所なり。初め海軍中將榎
本武揚、開拓使大書記官山内堤雲、嘗て石鏃、石劍、雷斧及び陶器古罽
襪を土中に掘り得たりしことを聞知し、明治十一年來りてこれを觀、其
の時此の刻文ありしを發見したりと云ふ。翌十二年香港大守『ヘンチツシ
』來觀のとき、風雨の蝕する所となりて、其の大半を失へりと云ふ。
刻文の寫は東京帝國大學にあり。

● 追分夕張間

● 追分停車場

追分

は室蘭手宮間に詳記す。

● 川端停車場

追分停車場を距ること五哩八鎖。

川端停車場を距ること五哩七十五鎖。

●紅葉山停車場

瀧の上停車場を距ること四哩四鎖。

●清水澤停車場

紅葉山停車場を距ること五哩二鎖。

●鹿の谷停車場

清水澤停車場を距ること四哩七十二鎖。

●夕張停車場

鹿の谷停車場を距ること二哩一鎖。

登川村 夕張炭礦探掘場の所在地にして、炭山に依りて一小市街をな

し、警察分署、戸長役場、郵便局、學校等あり。市街は、『シーホロムベ

ツ』の溪流に沿ふて、山峽に入り幽邃なる別天地なり。

夕張名所 夕張川の上流にありて、奇岩突兀、怪石磊々、山水の奇觀名狀すべからざるものあり。然れども未だ其の探檢を遂げざるを以て、詳かに記したるものなし。

●岩見澤歌志内間

●岩見澤停車場

前既に室蘭、手宮間の部に詳記したるを以て略す。

●峰延停車場

岩見澤停車場を距ること五哩二鎖。

●美唄停車場

峰延停車場を距ること五哩二鎖。

●奈井江停車場

奈井江炭山

最近の發見に係るものにして、炭質良好なりと云ふ。美

唄停車場を距ること二哩七十六鎖。

●砂川停車場

砂川停車場は、官設鐵道の起點にして、炭礦鐵道に接續し、市街は、稍殷賑なり。

●神威停車場

砂川停車場を距ること七哩七十三鎖。

●歌志内停車場

歌志内は、終點にして神威停車場を距ること一哩七鎖。

●岩見澤幌内及び幾春別間

●岩見澤停車場

岩見澤は室蘭手宮間に詳記したるを以て略す。

●幌内太停車場

幌内太は、幾春別、幌内二線の分岐點なり。岩見澤を距ること六哩八鎖。

●幾春別停車場

幌内停車場を距ること四哩七十三鎖。

幾春別炭山 明治十八年六月の開坑にして炭層は四層に分れ、厚さ三尺乃至七尺産出炭の用途は汽鑪用、鍛冶用に供す。

●幌内停車場

幌内太停車場を距ること一哩七鎖。

幌内炭山 明治五年、札幌の人早川某、始めて此の地に煤炭を發見し、同十二年に至りて大坑道を開掘し、以て採炭に従事す。炭層は、四層に別れ、其の厚さ三尺乃至六尺あり。炭礦株式會社の炭山中、最も古きものにして汽鑪用、鍛冶用に適す。其の東二里餘にして幾春別炭山に至る。幌内、幌内太及び幾春別の三地は、恰も不等邊三角形をなせり。

●砂川旭川間

●砂川停車場

砂川は、前既に岩見澤、歌志内間に詳記するを以て略す。

●瀧川停車場

瀧川村 は大農村にして東西凡二里、南北四里、廣袤凡そ十五里に涉り、空知太に於いて市街の形をなせり。空知太の地たるや、石狩、空知兩川の相會流するところにして、前は新十津川の農村に連り、後は丘陵を負ひ、南に石狩の平野を控ひ、北に雨龍の平原あり。山姿稍迫りて、二大原野の咽喉を扼し、天鹽上川兩街道の要衝に當り、物貨輻湊、往來甚だ瀕繁なり。

空知太橋 空知川に架する一大鐵橋にして長さ百餘間、北海道に於ける現今最長の橋なり。

●江部乙停車場

瀧川停車場を距ること五哩七十四鎖。

●妹背牛停車場

江部乙停車場を距ること四哩六鎖。

●深川停車場

妹背牛停車場を距ること四哩七十五鎖。

●納内停車場

深川停車場を距ること四哩六鎖。

●神威古潭停車場

納内停車場を距ること三哩七十七鎖。

神居古潭 は北海道名勝の一に數へられ、旭川驛の北方四里、石狩川の兩岸相迫りて壁立千仞、巉岩障屏を成す。十數年前にありては、雲梯霞棧、深く閉して、險崖深潭、容易に探ること得ざりしが、官設鐵道旭

川線の開通してより、鐵路は其の側を通過するを以て、車中にありて居ながらこれを觀ることを得るに至れり。元來此の地は、空知、雨龍、上川三郡の境にして又上川、石狩兩平野の關門なり。石狩日記に曰く、神居古潭『シキウシバ』といふに着す。此の所、土人等皆荷物を上げ、乗り來りし舟を繋ぎ置く處なり。故に此の名あり。又、向岸に岩窟あり、其の奥を知るものなし。雪中には皆玆に入りて宿すとかや。これより兩岸峨々ど聳々、山尖り、樹老ひ、怪岩奇石にして皆滑かなり、岩間には種々の異草多く見ゆ、水怒り、谷響き、如何にも龍蛇をも潜ましむるがごとく怪しまるなれど、別に異なる物も住まざれども、斯くのごとく數十日の水上に潜龍鮫魚の居ること奇と云ふべし。土人括楯を提げて、岩上に暫時停立せしが、四尺ばかりの潜龍鮫魚を一尾と三尺ばかりの『チライ』（和名いわないど）を得來る。又、一人は赤箭天麻を五六本取り來る。これは土人の薩摩芋なりとて、焼いて我等にすゝめ、味噌汁にも

なしくれぬ、夜に入りて跡舟も來りしが故に、石上に一儼を傾け、巖根を枕として眠る。又一奇なり。十八日、朝はやく遂を出づれば、土人、石の凹に水を入れて嗽がしむ。余は、一人を伴ひて、斷巖を攀ぢ、巨石を刎ね越し、一々名區を見物し行くに『ホロレブシベ』と云ふ處、兩岸川中へ聳ゆる處に、一つの瀧あり、五段になりて落つるなり。『ホロレブシベ』といふは、其の上水中に大なる烏帽子のごとき岩突出す。『ホロレブシベ』は前に、同じく南岸盛まる處の瀧なり、奇石水中に挺出して、其の間、獅子飛とも云ふべき所にして、土人等が常に其の下渦巻ける深潭の上より括楯を使ふ所なりとぞ。傍に鬼の足跡とて、凡そ三巡りばかりの井のごとき穴三つあり。深泉一丈餘、又僅に五六間を過ぎて、『エモシクシ』といふは、山靈の鬼を斬らんとして、此所に刃反を切込みし所なりと云ふ。『サヌシベリ』と云ふは、兩岸いよく窄り、其の上水渦を巻き、『テッシオコナイ』とは、南岸に一條の飛泉あり、水底に柵に結び

がどく、一すぢの石垣の様なるものあり、過ぎて『ハルシナイ』といふに出づる所にて、少し漉流になりて、丸木船も五六艘備へあり、是れより又船にて上るなり、其の度の間に、石面に記し置く。

水聲耳既慣。眠到東方白。雲晴日三竿。起來先嗽口。殘山亦剩水。危棧蜀中向。歷々起奇景。筆凡慙放翁。山中兩奇絶。神鑿與鬼工。看來皆破膽。造化功無窮。嵩罽水愈怒。吼々恰如雷。囑目皆堪記。愧無華客才。

水底は磊々たる大石、苔滑かにして厚く、水急なり。崖樹枝を接し。葉密にして根を露はし、掌立の險崖には、白糸を亂せしがどく、或ひは布を曝せると怪しまる、飛泉數條の處を過ぎ、左の方に『イツシヤバ』《鬼首》といふ處に至る。數丈の巨岩の水中に聳立す。土人等は、此所に、木幣を削りて、途中の安さを祈る。『アソナイフイラ』とは、突出したる大岩に、流れ碎けて、波濤を逆立す。『カモイネトバ』とは、七八

丈の立岩、恰も鬼の體のごとき物峙立す。此の邊に到る愈々急流なり。二人は、樹の根岩角に上りて、繩もて曳き、三人は、水棹にて突き張り、余は、垢を汲み捨て、辛苦萬苦して上るに、彈指の油断をするや、數間を流され。其の危きこと數度に及べり。『レイエコロプイ』といふも同じき急瀬なり。『ドレサフラテフ』といふは、彼の鬼神の携へ居たる蕎麥葉貝母（和名鹿がくれ百合と云ふ）を入れし蘿の化石なりとて、すべて此の鬼神には、種々の縁故もありしが、土人等他に語るを禁ぜりとかや。過ぎて『テ、コツナイイタシナイ』等數丈の瀧あり。『エタンベツグト』此の邊へ來るや、少しく漉流になりて、先づ安心をなしぬ。過ぎて『チカブニ』といふ山の麓に着し、宿さんとするに、蚊多くして寢がたき故に、夜中俄に船を出し、流水につなぎて一夜をあかしぬ。其の木に又一絶を記す。

繫船雲揚畔。罪微暮霽浮。蓬窓苦蚊齒。半夜浮中流。

十九日朝、解纜て行く。「キンクシベツカラベツ」等を過ぎ、「チツベツト」『忠別太、石狩、忠別、二川會流の所』に着す。此の所番屋一棟あり、先づ一同安着を祝し、跡舟を待ちて、水源行の人足を定め、上川住の十人共一軒に煙草一把に人別に絲五つ、針五本づゝ、其の外六十餘歳のものへ、手拭一筋を遣はす云々。

●伊納停車場

神居古潭を距ること五哩四鎖。

●旭川停車場

旭川市街 は上川平野の中央に位し、石狩、忠別兩川の相會流するところなり。商家連櫛櫛比し、大道は、碁盤目のごとく、街衢廣濶、規模宏壯、實に大都會たるの觀に耻ぢすと云ふべし。今や交通機關は全く整備し、石狩平野より來るところの中央街道は、既に越路、中越を経て、北見國の海岸に達し、美瑛、忠別の兩大原野を貫通する、支道のごときも

既に開鑿せられ、官設鐵道中、天鹽、十勝の二線は、既に南北に延長し、旭川市街は、即ち其の交叉點となり、四通八達の要衝に當るのみならず、北の方一里にして永山市街に連接し、南は、美瑛川に沿ひて、離宮の豫定地たる神樂村を控へ、附近の大農場は數里に渉り、物貨集散の燒點となれるを以て、年々歳々繁盛を加へ來りしが、前年第七師團を設置せられしなり、頓に隆昌を來し、北海道中央部の大都會となれり。思ふに數年を出でずして札幌を陵駕するに足らん。

第七師團 は上川にありて、廣大なる兵營を有し、東西二十二町、南北二十五町、面積三百萬餘坪に近く、其の設備のごとき、全く相整へり、兵營及び官舎のみにて、五百戸に上り、酒保及び附近の村落を合せば、兵營附近に於いてのみ三千餘戸に達す、此の地は、兵營の造營前にありては、空漠たる一大原野に過ぎざりしが、近時頓に殷富を極め、札幌より旭川を通じて出入する貨物のごときは、實に無數なりと云ふ。

永山村 旭川市街の北方一里より起り、東西二里八町、南北二里に渉れる一大農村なり。此の地は旭川市街に亞ぐ要區にして、開創日淺きも、來住するもの年を遡ふて多く、數年の間に著しき、發達を成すに至れり。蓋し旭川市街と相連接して一大市街を形成するは遠きにあらざるし。

●旭川落合間

●旭川停車場

前に掲ぐるを以て略す。

●邊別停車場

旭川停車場を距ること六哩二鎖

●美瑛停車場

邊別停車場を距ること八哩六鎖。

美瑛の掘割 は上川郡にあり、鐵道は官線の空知より來るもの、旭川に至りて南北二線に分岐し、一は永山を経て天鹽に入り、一は美瑛の原野を通過して十勝に至る。掘割は、即ち此の間にあり、其の土工の廣大なること嘆稱するに堪わたり。

●上富良野停車場

美瑛停車場を距ること九哩七十八鎖。

●中富良野停車場

上富良野停車場を距ること四哩七十八鎖。

●下富良野停車場

中富良野停車場を距ること四哩五鎖。

●山部停車場

下富良野停車場を距ること七哩七十六鎖。

●金山停車場

山部停車場を距ること九哩四鎖。

● 鹿越停車場

金山停車場を距ること六哩。

● 幾寅停車場

鹿越停車場を距ること四哩七十三鎖。

● 落合停車場

幾寅停車場を距ること六哩二鎖。

● 旭川士別間

● 旭川停車場

前に掲ぐるを以て略す。

● 永山停車場

旭川停車場を距ること五哩七鎖。

● 比布停車場

永山停車場を距ること四哩七十九鎖。

● 蘭留停車場

比布停車場を距ること三哩七十五鎖。

● 和寒停車場

蘭留停車場を距ること八哩四鎖。

● 劍淵停車場

和寒停車場を距ること五哩七十五鎖。

● 士別停車場

劍淵停車場を距ること五哩四鎖。

● 釧路白糠間

● 釧路停車場

釧路は白糠に至る鐵道の起點なり。

●大樂毛停車場

釧路停車場を距ること四哩七鎖。

●庶路停車場

大樂毛停車場を距ること三哩七十五鎖。

●白糠停車場

庶路停車場を距ること六哩一鎖。

白糠村 白糠郡内の大邑にして東海岸の要路に當り、郵便局、戸長役場、小學校等あり。地は、茶路川の東岸に臨み、附近に肥沃の地多きを以て將來有望の區たり。

●然別蘭東間

●然別停車場

然別村 後志の國にあり、小樽を距ること數里、近傍に有名なる別鑛山あり。

●仁木停車場

然別停車場を距ること二哩四鎖。

●余市停車場

仁木停車場を距ること二哩七十八鎖。

●蘭東停車場

余市停車場を距ること三哩三鎖。

●函館本郷間

●函館停車場

函館市街 是渡島の國龜田郡の西端南、峯のごとく突出せる函館山の山嘴より一條の市街をなして砂濱に連續せり。此の地館を建てたるは文

安二年、龜田郷の領主、河野政季の築くところにして、東西三十五間、南北二十八間、七重濱より望むときは、恰も箱のごとくなりしを以て、箱立の稱あり。子季道、蝦夷と戦ふて敗死し館遂に廢す。實に永正八年四月なり。幕府のとき奉行を置きて管せしめしが、其の邸宅は、河野氏の館地にして嘗て支應を置きし所なり。往時にありては、實に寥落たる一小漁村に過ぎずして、蟹戸漁家、點々砂濱にあるのみなりしが、安永、享和の頃、松前氏の政道甚だ衰へ、政令普く行渡らざりしかば、幕府は、奉行所を置いてこれを管せしめ、附近の漁村より移住せしめしかば、漸次繁盛となり、嘉永、安政の頃に至りては、既に嚴然たる市街を形成するに至れり。明治に及んで外國との互市場となすに至るや、頓に勃興して壯大の高厦を建築し、自亞の爛々たるを觀るに至れり。南方に函館山を負ひ、街衢の一端は、山に倚りて家を構へ、大賈豪商櫛を連ぬ、商業最も繁盛を極めぬ。凡そ内地より北海道に至るもの、一たび此の地を過

ぎざるはなく、且つ晩春、鮮漁の季節に至れば、市中の繁榮實に一層を加へ。内地の都會に於いて觀るべからざる所の盛況を呈するに至る。区内に於いて建築の宏壯なるものは、函館控訴院、地方裁判所、區裁判所、區役所、郵便電信局、函館病院、税關、警察署、郵船會社支店、學校、銀行、會社等なり。市中最も繁盛なるは、相生町、未廣町、惠比須町、地藏町等にして、豪商富家櫛を並べ、商業最も盛にして、百貨輻湊、一として供給辨せざるはなし。角大、角上、山三、丸和、角長等のごときは、旅館の著名なるものにして、皆海岸濱通りに在り。水道は、函館山より水を引き、電燈は赫々として夜を照らし、電話線は縦横に架設し、坐ながらにして能く用を辨じ、鐵道馬車、馬車、人力車等ありて、交通の機關整備せり。道路は、東西兩岸より來るものにして、四方に通じ、福山街道は、上磯より來り、江差街道は、大野より入り、札幌街道は、森より來る。而して近時小樽に通ずべき鐵道の本郷まで運轉しつゝある

を以て、大に利便を興へり。此の港は日本五港の一にして外國との貿易額は、もとより横濱、神所に如かずといへども、日を追ふて繁盛に赴けり。而して此の海澳は、市街の西北巴灣にありて、東西二十二町、南北一里六町、深さ三尋乃至十五尋にして、海深く、山高く、能く風濤を避くるに足る。實に北海第一の良港と云ふべし。港の西端なる突角に砲壘あり、これを辨天砲臺と云ふ。其の東邊は、岩礁亂立及び砂灘なり。故に航海の安全を期せんがため河野潤岬の北端に燈臺船を置きて標とす。明治四年、工部省の建設する所にして、橋上に赤球の標を掲ぐ、燈光は、不動白色、其の高さ海拔三丈六尺、能く十海里を射照す。實に港内に於ける一奇觀なり。以下此の市内及び附近の名勝地を紹介せんに先たち、本道著名の都邑に至る里程を示さん。但し鐵道に依るべきものはこれを省く。

宗谷へ百二十七里十町。

江差へ二十四里十七町。

浦川へ五十八里。

大津へ九十七里八町。

網走へ百四十一里二町。

壽都へ三十六里二十町。

根室へ百四十六里。

釧路へ百七十里。

福山へ二十一里三十町。

岩内へ四十五里七町。

函館公園 市街の東南、谷地頭町と青柳町との間にあり、南西に函館山を負ひ、北は港に臨み、東は、津輕海峽より大東洋に對し、眺望最も曠濶、且つ奇絶なり。此の園は、明治七年の開設にして地積凡そ一萬四千餘坪、後十一年、官民協同して、假山を築き、花樹を栽る、大に風致

を加へたり。園内なる觀望壇は、衆庶の登臨に供し、觀望甚だ佳なり。壇下に博物館あり、北海道産の珍物を集め、縦覽に供す。谷地頭の湯 公園の東南に接するを谷地頭と云ふ。幽邃の地にして別莊旅館等あり。鑛泉の湧出するあり、これを谷地頭の湯と稱す。冷泉なり。これに溫度を加へ以て、入浴に供す。函館山 一に臥牛山と云ふ其の形の似たるを以てなり。山は三峰より成る、一を御殿山と云ひ、其の高さ一千百尺、二を藥師山と云ひ、其の高さ八百尺、三を立待峯と云ひ、藥師山よりは、稍低し。登山の路二條あり、左よりするを立待坂道と云ひ、沙見町より登る。右よりするを藥師山道と云ひ、船見坂より登る。山險にして道九折、一步一喘、未だ半腹ならざるに、函館市街は、脚下に瞰望することを得べく、更に登臨すれば、東南は、津輕海峡を隔て、遙に陸奥の大間岬と相對し外が濱一帯の連峯は、天際に波濤の起伏するがごとく、南に矢越岬あり、北に駒

が岳、西に松前千軒山あり。新開墾地の萬頃の田疇は、皆一眸に集りて白砂一帯、長堤十里、實に絶勝と云ふべし。水道配水池 高低の兩區あり。高區配水池は、函館山腰の地、二萬坪を以て敷地に充て、海拔凡そ三百呎の場所を掘鑿して設置したるものなり。池形は長方形にして對隅に六角形流入井ありて、一方は池中に通ず。池壁は、すべて斜面に造り、以て氷塊を除き易からしめ、底面は、勾配を附して掃除に便ならしむ。而して人口六萬人に給する水量一日分を貯ふ。低區配水池は、給水人口六萬人に使用したる容積約九十六萬六千『ガロン』の既成配水池を以て、一部に充てたるものにして、猶ほ給水人口十一萬人に滿つるに先ち、他に約八十萬『ガロン』を容るべき一池を新設として十一萬人一日の給水量を貯ふべきものなり。五稜廓 函館市街の東北二十五町、龜田村の効外にあり、安政二年、函館奉行竹内保徳、堀利熙、諸教授武田斐三郎をして、經營せしめたる

砲壘にして菱花の形をなし、龜田川の水流を引いて周回の外濠とし、追手門及び正北并に東北の三門を設く。而して追手門外に三角土壘を設け内外を蔽遮し、小濠を穿ち、其の兩端は大濠に通せり。廊内に縦横の水道を通じ以て、飲料に供す。周回凡そ千九百餘間、高凡そ一丈五尺、直径百八十間、地積五萬四千二百二十二坪あり、明治元年、幕府の臣榎本次郎(武揚)等此に據りて官軍に抗せり。明年亂平ぎて、五年五月これを毀ち空廓を存す。今陸軍省の所轄たり。

辨天岬砲臺 此の砲臺は、松前氏のとき始めて築造せしものにして、安政二年、函館奉行これを増築せり。六角不平等面にして當時堅固と稱せられしが。今や兒戯に等しきものとなれり。

八幡神社 谷地頭町にあり、慶安元年の遷座にして應神天皇、武内宿禰住吉大明神を合祀す。國幣小社にして市内の總鎮守なり。例祭は甚だ賑ふと云ふ。

大森濱海水浴 函館の東方、外海に面したるところなり。岩礁の間、波穏にして海水浴場を設く。夏期に至れば、浴客雲集して頗る殷賑を極め、且つ眺望快濶、以て心身を慰むるに足る。

柏野競馬場 市街の北方にあり、毎年春秋二期、函館市民の催にかゝる競馬會あり。此の日皆盛裝して來觀し、殊に婦女子は、今日を晴と着飾りて、來集するもの多ければ、恰も神社の祭禮に於けるがごとく、頗る雑踏を極め、一名物となれりと云ふ。

湯の川温泉 函館の東方一里二十町、松倉川の河口、下湯の川村にあり。泉質は、硫化水素にして九十五度の温度を保ち、無色透明、稍苦澁の味を帶ぶ。此の地は、北に丘阜を負ひ、前は、東潮首崎に至るまで、一帯の砂濱にして眺望絶佳なり。函館よりは道路平坦、馬車を驅るに宜しく且つ夏期に至れば、此の附近に海水浴場を設くるを以て、來遊するもの甚だ多し。

赤沼 函館水道の水源地にして函館の東北凡そ三十町ばかり、赤川の水を引き、一個の水源地を造りしものなり。海拔二百三尺、其の沈澄池の容積は、二十五萬八千餘『ガロン』に達す。

● 桔梗停車場

函館停車場を距ること四哩三鎖。

● 七飯停車場

桔梗停車場を距ること三哩四鎖。

七重試験場 七飯村にあり、文化年間、七重村の人、卯之助なるものあり、官に請ひて允許を得、五百餘坪の地を借り、此に園圃を拓き、杉苗を植ゑたりしに始まる。後、函館奉行、これを墾成して、朝鮮人參を植ゑしが、安政の初年、函館の官吏河津某、再び藥園として廣大の地積に廣げ、丸山の址より久根別山に至るまで、廣袤十萬餘坪。其の周回に築堤をなし、内に牛羊を放養し、且つ杉、桑、柏、松等の樹木を栽培す。

明治六年、開拓使農業課の試験場とし、米國産の動物及び植物を移植し、以て其の適否を試みたり。今其の形の存せるもの即ち是れなり。

大沼熊の湯 七飯村より一里三十四餘町、嶺下なる字瀧の澤にある温泉なり。温度は、常に九十二度を保ち、諸種の皮膚病に特效ありと云ふ。

大沼小沼 前記の熊の湯より札幌街道の驛次を隔て、北に大沼、小沼の兩水あり、相通じて其の周圍七里ばかりの湖水をなす。街道の嶺上より眺望するとき、前面に當れる駒ヶ岳は、其の全容をあらはし、一泓の碧翠と相對して、景趣の甚だ絶佳なるを見る。其の山容は、芙蓉峯に似たるを以て一に渡島富士と稱す。

葦菜湖 渡島富士の山麓にあり。周回凡そ一里、湖中に葦菜の佳なるものを産するを以て此の名あり。池邊に九三旅館あり。夏期外國人の來遊するもの多し。湖の中央に辨天社あり、亦鯉及び鮒を産す、湖の風光と、もに其の名世に著る。

東京灣内汽船航路

東京灣内汽船の航路は、東京と安房館山間を往復するものにして、其の間諸所に寄港して乗降に便す、灣内沿岸の各地に至らんとするものために左に其の寄港地及び勝地を案内せん。

●浦賀

○浦賀町 は相模三浦郡にありて、横須賀軍港の南一里三十二町、灣内深く侵入し、其の兩岸には人家櫛比し、古來船舶の碇泊所なり、嘉永年間米國使節渡來の地にして、其の名著る、航程二十四海里三時間にして着すべし。
ペルリ記念碑 は浦賀町久里濱にあり、明治三十四年の建設に成れり。

●保田

○保田 は安房國の一小灣なり、汽船は浦賀を發して小久保、竹岡、

金谷に寄港し、而して此に寄るものなり。

元名の羈王樹

は保田村の元名にあり、高さ一丈餘、東國に稀なる奇觀なり。

鋸山日本寺

は山麓保田より登ること二十町にして二王門に達す、僧

行基聖武天皇の勅を奉じて草創せる禪刹なり、山中堂宇多く、眺聖絶佳なり、其の山嶺に十州一覽臺と稱する處あり、十國を一眸の中に收むるを以て此の名あり。

●船形

○船形 は保田より勝山に寄港して着すべし。

船形觀音

は船形村大字船形にあり、普門院大福寺と號す、仁明天皇

の御宇、慈覺大師の建立せし處なり、地は高所にあり、鏡浦の碧波に白帆の走るを見るべく眺勝佳なり。

●那古

○那古 は船形村の南隣にある寄港地なり、東京より五時間弱にして達すべし。

那古の観音 は補陀洛山普門坊千手院那古寺と號し、養老元年の創建にして行基僧正の開基なり、地は高處にあるを以て、眺望は船形と相伯仲の間にあり。

●北條

○北條 は川を挟みて館山町と相接す、東京より航程凡そ六時間。

●館山

○館山 は北條に隣りたる市街にして、灣内水深くして、大船巨舶を容るゝに便なり。

海水浴場 は灣内の奥まりし處にあれば、水清く、波靜にして老幼婦女には最も適當の場所たり、木村屋といへる海水浴旅館ありて清潔なり

館山公園 は館山町の西南丘上にあり、丘下を瞰望すれば、鏡浦の一

碧翠を凝らして麗かなり、鷹島、沖島の二島は、近くして將に呼應せんとす。

鷹島 は館山の海岸より十數町の沖にあり、松柏蒼蔚として辨財天祠を其の中に祭り、風光甚だ佳なり。

根本海水浴 北條より一里二十七町にして相達すべし、此の地は、安房南端の岬角にして太平洋に面し、海水清澄、浴場として最も適當の場所なり、近傍に野島ヶ崎あり、崎の盡くる處に燈臺を設く、高さ九丈九尺、光芒十七海里の外に達す。

誕生寺 は安房國湊村大字小湊にあり、後に小湊山を負ひ、前は蒼海に臨む、即ち日蓮上人誕生の舊址として參詣人常に絶えず、本寺の東南海中に蓮華濤と云へるところあり、是は、貫名重忠の居館のありし處にして、日蓮は實に此に生れしなり、明徳中海嘯のために陸地は變じて海となりしものなり、而して小湊に至らんとするものは、東京勝浦間の汽船

に乗べし、されば二時間乃至三時間にして着することを得るなり。

横濱 小樽 間

○横濱小樽間に於ける日本郵船會社の定期船は、先づ横濱を午前に發すれば、翌日の午後は陸前秋の濱に着すべし、此間二百七十五海里、それより函館へは其の午後に着すべければ、横濱を發程して三日目には函館に着することを得べきなり、横濱より五百二十六海里とす、又これより小樽へは百十一海里にして其の翌日の午前に着すべし、

○函館 は北海道の一要津にして、我が國五港の一に位し、貿易稍盛なり、小樽は北海鐵道起點にして、それより道廳所在の札幌に通すべし、其は汽車の部に記載せり

小樽直江津間

○小樽を發して函館に寄港し、それより羽後の能代に至る、小樽より四

日目とす。

●能代

○能代 は羽後の東部に位する良港にして奥羽北線の鐵路は、今や此まで通せり、こゝを出づれば、其の翌日は土崎港に達すべし、此間六十五海里。

●土崎

○土崎 は秋田市を距ること西北一里三十町にあり、秋田縣下第一の良港にして、米穀貨物の集まるもの多く、船舶の出入織るがごとし、さて土崎を發して酒田に着するは其の翌日なり、此の間六十二海里とす。

●酒田

○酒田 は羽後國最上川口にある一商港にして船舶常に輻湊し、人家稠密、巨商多し、土崎港を距ること六十二海里、山形市を距ること二十八里二十町、秋田市を距ること二十八里十九町とす。

日和山公園 酒田の西南にあり、一帯の丘埠にして、南は最上川に臨み、北は遙に烏海山に對し、風光明媚の勝區たり、其の西に一道を隔て、日枝神社あり、縣社にして大己貴命を祭れり。酒田を發して次に迎ふるは新潟港なり。

●新潟

○新潟 は北陸の要港なり、其の詳細は、鐵道の部に掲げたるを以て略す。

●直江津

○直江津 は新潟を發して其の翌日に着すべし、此の間六十三海里、此の地も亦鐵道の部に詳記せり。

●伏木

○伏木 は直江津よりは六十海里内外、新潟を距ること百三十海里、此も亦鐵道の部に詳記せり。

●敦賀

○敦賀 は伏木を發し、能登半島をめぐり西南に航せば百四十六里海にして達すべし、是亦鐵道の部に詳記せり。

●境

○境 は伯耆の良港にして、敦賀を距ること百四十三海里、港内水深く、浪靜にして大船巨舶を容るゝに便なり、東西二十三町、南北八町、深さ四仞より五仞に至る、此の地は鳥取市を距ること三十里八町、米子を距ること五里一町なり。

●下關

○下關 は長門の一大良港にして山陽鐵道の終點となり、市街段賑なり、山陽鐵道の部に詳記せるを以て略す、境を距ること百九十海里あり。

北海航路

函館稚内間

●函館

○函館 起點として西廻りには、第一に江差に着すべし。

●江差

○江差 は渡島國檜山郡にある一港にして鷗島は其の前に當り、水深くして大船を泊するに足るべし、島の長さ十町、幅二町半、狭小なる一島にして島上に燈臺あり、此の地は物貨の集散點なれば、其の市街は甚だ般賑なり、殊に鮭魚の節に至れば、其の雑踏甚だしく旅舎はいづれも満員に至ると云ふ。

●岩内

○岩内 は北海道西海岸の一港灣にして、市街は一萬五千餘の人口を

有す、港内は常に商船幅濶し、汽船の出入虚日なく、交通頗る便なり。
岩内石炭山 は岩内を距ること北方三里、茅沼川の上にあり、開掘甚だ盛なり、川口より炭礦に至るまで鐵路を敷設すること三十二町、以て運輸に便せり。

●小樽

○前に記す

●稚内

○稚内 は北見國の北端に位する一要港にして、其の市街に郡役所、警察署、區裁判所、郵便電信局、病院等あり、小樽を距ること百四十七海里、冬季に至らば、流氷港を封すといへども西岸ルエランに船を寄せて以て運搬することを得べし。

●枝幸

○枝幸 は北海岸中有數の港にして、宗谷岬を距ること東南二十五里

此の港附近には、鯨の好漁場を控え、一年間輸出入物品の價格九十萬圓餘に上ると云ふ、又頓別、禮文及び歌登等へは沿海通船を以て、貨物の回漕をなしつゝあり。

●紋別

○紋別 是東南枝幸港を距ること五十海里、陸路よりせば二十三里にして相達すべし、灣内は沙濱にして水深からずといへども、北に辨天崎の突角ありて、北風を凌ぐことを得べければ、辛うじて船舶の碇泊をなすことを得るなり。

●常呂

○常呂 是紋別を距ること五十三海里、港灣良からずといへども、常呂川の川口にありて船舶の出入絶えず。

猿間湖 是北海道中第一の大湖にして、東西六里十五町、南北廣き所二里二十五町、周圍二十三里七町あり、此の湖は一條の砂洲を以て、僅

に海と相隔て、東端館渚村に於いて、海水と相通せり、故に其の水微しく鹹味を帯ぶ、湖心に舟を泛べて清遊を試みば、其の快味言ふべからず。

●網走

○網走 是網走川の川口にして、其の市街を北見町と云ふ、郡役所、警察署、郵便電信局、病院、日本銀行出張所等あり、家屋櫛比し、稍繁昌なり、市街の東端にシンド岬と相對して、ワツタラ岩と稱する岩礁あり、其の間を網走港とす、一月乃至四月は流水のために海路杜絶す。

函 館 根 室 間

●函 館

○函館 是前に掲ぐるを以て略す

●森

○森 是函館を距ること七十六海里にして噴火灣に沿ひたる一小邑な

り、海上斜に室蘭と相對し、附近村落の中心として市街頗般賑なり、此の港の埠頭は有名なるものにして、木造なれども長さ百四十一間、幅五間半、海潮は其の深さ一定せずといへども干潮には、一丈八尺を數ふ。

● 室 蘭

◎室蘭 は森を距ること二十二海里、函館を距ること七十六海里とす、港内東西一里十町、南北一里、深さ三十餘尺にして、四時風浪の患なく、東海岸中の巨港にして、大艦巨舶を容るゝに便なり、市街は、人家稠密し、郡役所、警察署、郵便電信局、銀行、會社、病院等なり。洞爺湖 は室蘭を距ること三里弱、南方海岸を距ること一里七町、一帶の山脉其の東西を繞り、綠波岸を洗へり、東西二里二十八町、南北二里餘にして、湖中に一島あり、神堂島と云ふ、周圍八町、此の湖は嚴冬に至るも凍結することなく、凍結すれば必ず水族を凍死せしむると云ふ又一奇と云ふべし、其の眺望は、南岸に於いて最も絶佳を極む。

● 根 室

◎根室 は函館を距ること二百六十四海里、室蘭を距ること百六十九里、灣内風濤を避くるに宜しく、根室の國出入の咽喉なるを以て、其の般賑なること函館に亞ぐ、市街は根室半島高原の北側に位し、地方裁判所、區裁判所、郵便電信局、郡役所、警察署、憲兵屯所、側候所、銀行、會社等あり。風蓮湖 は北海道屈指の太湖にして、其の大き北見の猿間湖に亞ぐ、根室の西四里にありて長さ六里、幅廣き所二里、風光の賞すべきなく、嚴冬に凍結して氷上に海豹の眠ることありと云ふ

伊豆七島及小笠原島

大島 伊豆七島の中にありて、最大なる嶋嶼なり。賀茂郡網代港の東南十里にあり。周回十里餘、全島を六ヶ村に分つ。島の中央に屹立せる三原山は、常に硫煙を吹けり。

利島 大島の西南四里餘にありて、東京を距ること三十八里餘、周回二里餘。海岸は、斷崖絶壁のみにして船舶の近づくこと甚だ困難なり。人口二百有餘。多くは皆農業に従事す。

新島 利島の南方二里餘にありて、東京を距ること四十二里餘、周回六里に餘り、全島を二村に分つ。居民二千八百餘を有す。地内島、早島等これに附屬す。又この屬島なる式根島は、西南一里にありて、周回三里、人家なし。

神津島 式根島の西南二里にありて、東京を距ること四十七里餘、周

回五里餘にして全島を三ヶ村に分つ。居民一千七百餘。多くは農と漁とを兼ね。島の中央に天井山あり。數島これに附屬す。

三宅島 神津島の東南八里餘にありて、東京を距ること五十四里、周回八里餘、全島を五ヶ村に分つ。居民三千有餘、概ね耕漁を以て業とす。屬島に御倉島あり、人口殆ど三百を有す。

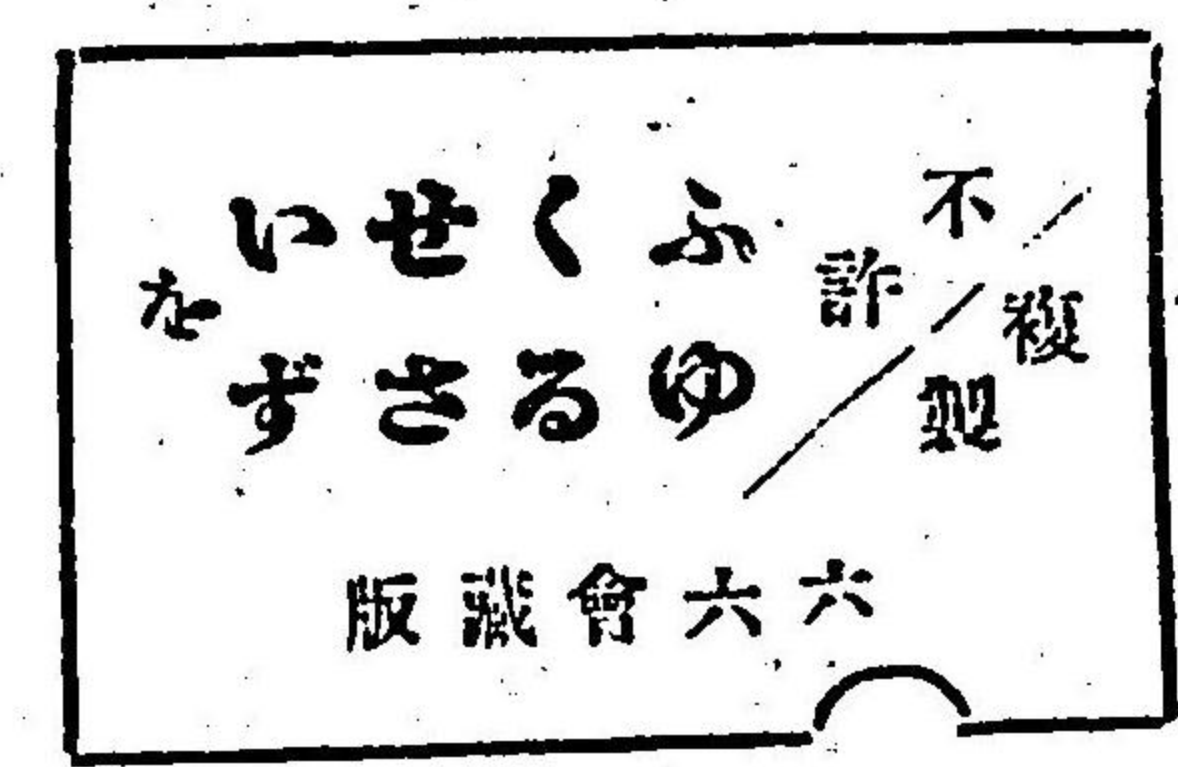
八丈島 御倉島の南方二十里にありて、東京を距ること七十七里、周回十餘里、全島を五ヶ村に分つ。人口八千七百餘。概ね淳朴の風あり、男は多くは耕漁に従ひ、女は養蠶又は機織を事とす。此の島と御倉島との間に一條の迅流あり、俗これを黒瀬川と云ふ。其の幅凡そ二十町ばかり、激潮常に東流す。屬島にして居民あるものは小島、青島とす。青島は古の所謂鬼ヶ島なるものなり。

小笠原島 八丈島の南百二十里にありて、東京を距ること二百二十餘里、大小八十九島より成る。最大なるものを父島、母島とす。これに次

を兄島、弟嶋、妹嶋等にして父母の兩島を環り小嶋其の間に點綴す。全島山谷深阻にして土地礫确なりといへども、氣候暖燠にして草木能く繁茂す。人口三百余、外國人の歸化せるもの十餘戸あり。島廳は大村にあり、二見港は西岸にあり、最も良港となす。扇浦に開拓小笠原之碑あり、大久保利通の撰文にして日下部東作の書なり。又其の近傍に、藤森圖高の碑あり。圖高は南部の人士なり。此の島の關拓に従事して大功ありと云へり。此の島は、文祿中、小笠原貞頼の檢出せしところなるを以て、此の名あり。山羊皮、鮫鱈、櫻欄等を産す。現時東京との間に一月一回汽船の往復するあり。

日本海陸漫遊の葉 東部終

明治三十六年六月廿五日印刷發行



著者 野崎 城 芳雄
著者 西村 寅次郎
著者 木田 吉太郎
著者 辻本 柳
著者 奥村 金次郎
著者 市田 五郎
著者 横田 十吉
發行者 同
發行者 同
發行者 同
發行者 同
印刷者 同

正價金壹圓貳拾錢

發行書肆

日本橋區通四丁目七番地
日本橋區通四丁目
日本橋區下槇町
京橋區南傳馬町一丁目
日本橋區中橋和泉町

六東集尚藍

々雲文古外

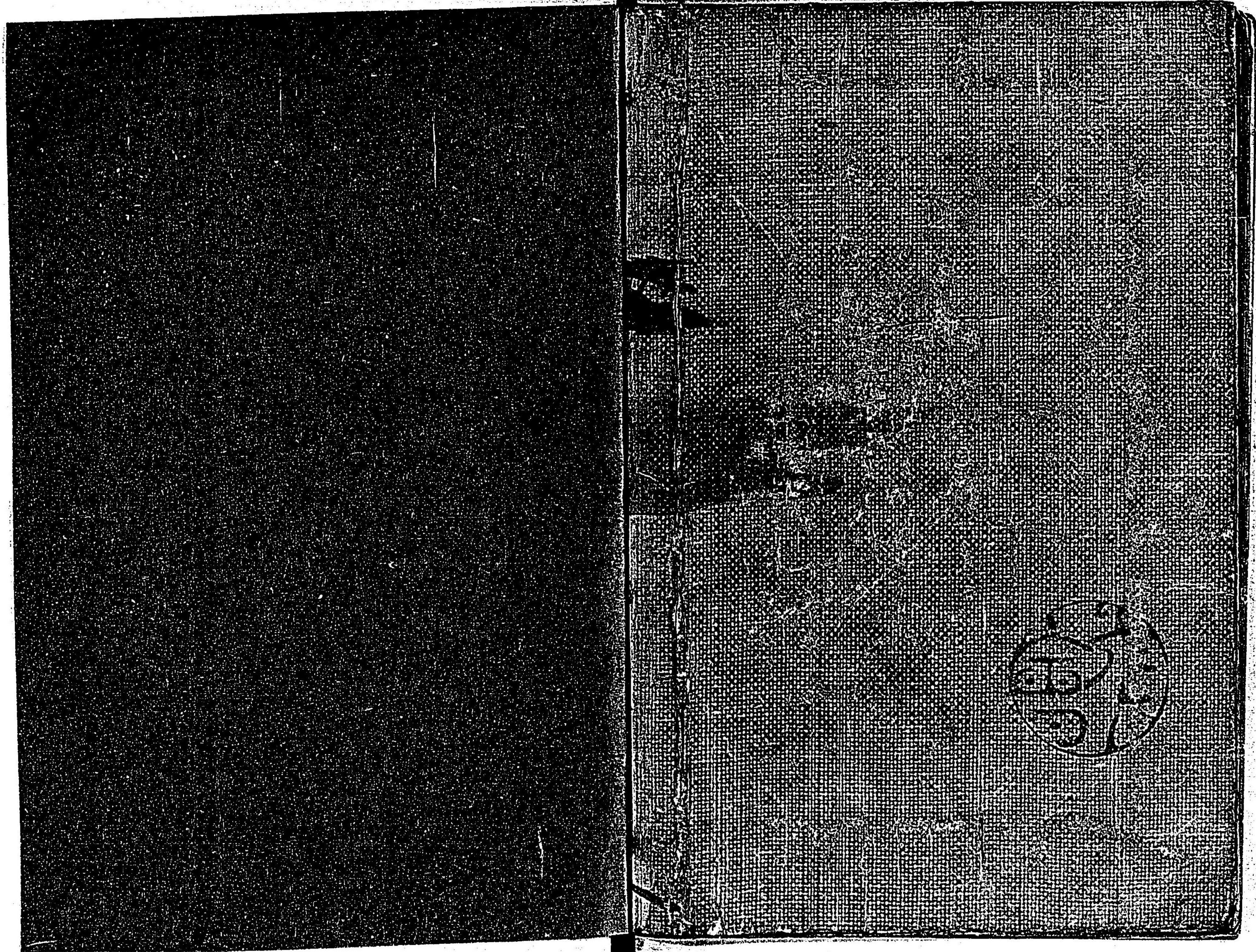
會堂館堂

94
150

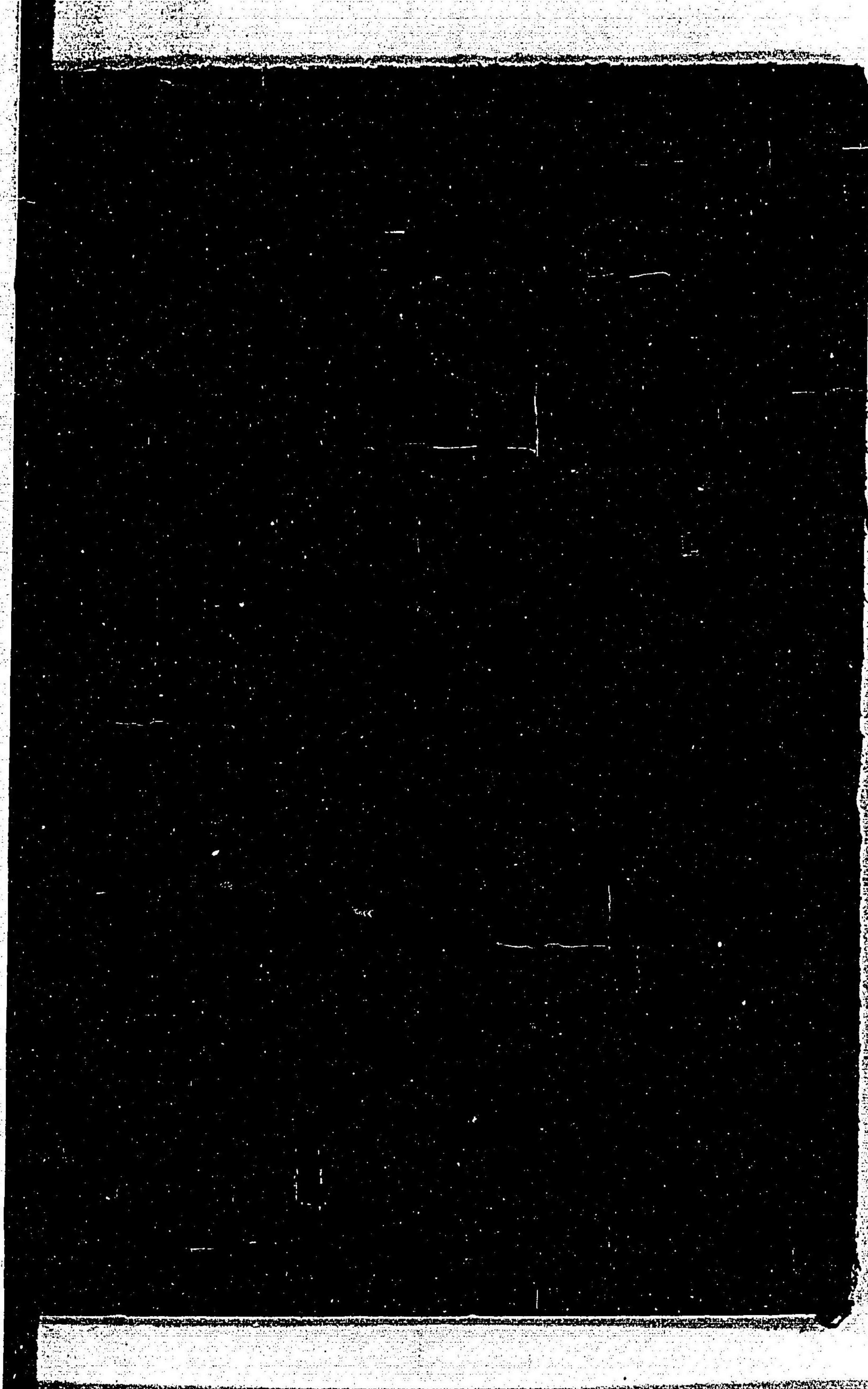
特別大賣所

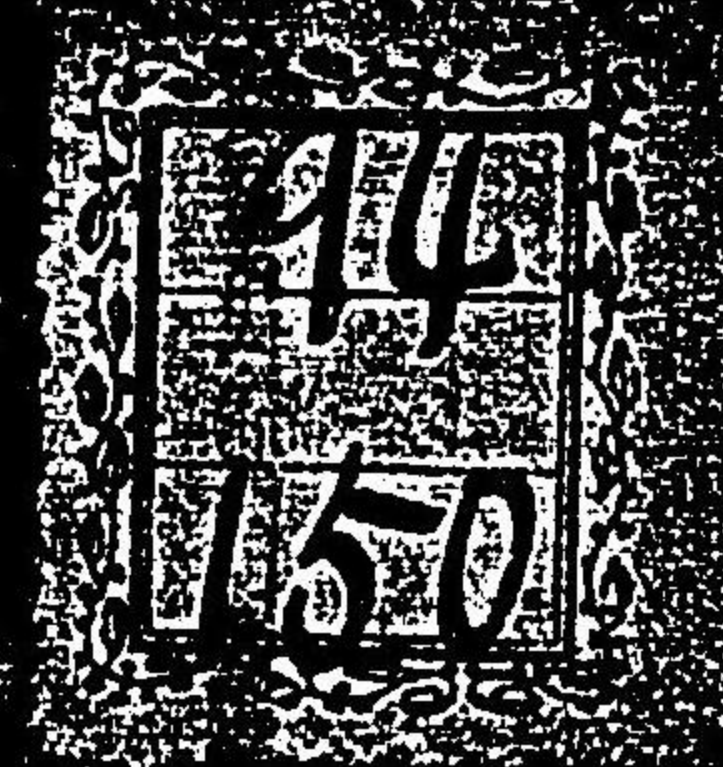
日本橋區通一丁目	大倉書店	京橋區弓町	松邑書店
同 通一丁目	嵩山堂	同 銀座三丁目	服部書店
同 通二丁目	嵩山房	同 銀座四丁目	春祥堂
同 通三丁目	林平次郎	同 出雲町	新橋堂
同 通四丁目	松本芙蓉堂	神田區雉子町	岡崎屋
同 箱屋町	前川文榮閣	同 表神保町	修學堂
同 今川橋際	大津洋堂	同 表神保町	東京堂
同 大傳馬町二丁目	文林堂	同 裏神保町	田屋
京橋區南傳馬町二丁目	目黒書店	横濱松ヶ枝町	弘集堂

◎賣捌所は全國到る所の書林、雜誌店にあり



94
150





022749-001-8

94-150

日本海陸漫遊の葉

野崎 城雄 / 著

M36

ADB-0537



